

コンテキスト化の合図としての指示的指標性について： 文脈から構築される意味と文脈を構築する意味

原 田 依 子

On the Referential Index as a Contextualization Cue: How Does Referential Index Create Context?

Harada Yoriko

Summary

In this paper, I argue that tense as a referential index works as a contextualization cue in a discourse. The underlying assumption is that meaning is polysemous, and therefore, appropriate interpretation is context dependent. This assumption implies that one's choice of expressions (how best to express oneself) is important not only to correctly infer meaning but also to determine the appropriate context.

Tense has traditionally been regarded as a deictic expression for the temporal relationship between the present and the actual time of events. From an aspectual point of view, however, there is asymmetry between the present and past tense. In discourse, tense locate events or state in time and space, and the choice of tense or temporal relationship implies from where and how the speaker conceptualizes them. This conceptualization indicates the speaker's viewpoint, contextual character, and specific semantic structure of the context. It explains how verbal information guides the inferential process and constructs the semantic structure of the context. The assumption here regards tense as an index of how to contextualize information.

1 はじめに

言葉は私たちを取り囲む世界を記述するための道具であり、文法や語彙は対象を時間・空間の中に位置づける形式であるといえる。従って、どの形式を用いてどのように表すかは、どのように対象を捉え、位置づけるかにより変化する。本稿では指示表現、特に時制に焦点を当て、時制のコミ

コミュニケーション上の機能について考察を行う。時制は、指示対象を位置づける典型的な表現形式であり (Lyons 1980)、その形式が本来持つ意味と使用されることにより示される意味・機能の関係を考えることは、言葉そのもの意味・機能を考えるうえで大きな示唆を与えてくれると考えるからである。

時制は中心としての現在時(発話時)と記述される事態の時間関係を表す。現在時制は発話時である現在の状況を表し、過去時制は現在時に先行する過去の状況を表すことから、時制の違いは現在からの位置関係の違いであり、位置づけられる対象としての事態に関係なく区別されることができると考えることができる。しかし、実際は、現在時制と過去時制では、文があらわすアスペクトに違いがみられる。過去時制に比べ、現在時制は動詞そのものがもつアスペクトが反映されにくく、特に動作動詞では、二つの時制で明確な違いが見られる。このことから、単に「位置づける」だけにとどまらず、位置づけ方の違いが、事態のとらえ方の違いを生んでいると考えられる。つまり、現在時制と過去時制では、指示の仕方が異なり、それにより、文レベルでのアスペクトの非対称性や文脈レベルでの機能の違いが派生しているのではないかと仮定することができる。

本稿では、まず言語表現における指示機能をどのレベルで捉えることが適切であるか検討し、その上で、文レベルでは対象を指示する機能をもつ表現が、さらに高次のレベルではコンテキスト化 (Gumperz 1982) の機能を持つことを指摘する。次に、考察の対象として取り扱う時制がもつ意味機能を、特に指示という観点から捉えなおし、最後に実際の談話データの中でそれがどのような機能を果たしているのか考察する。

2 意味のとらえ方とコンテキスト化の手掛かりについて

直示表現は、指示語や人称代名詞、時制などの文法概念を含み、話し手の「いま、ここ」とコンテキストとの関係から、対象を指示する。従って、何を示すかは、話し手とその状況が与えられて初めて明らかになることから、これまでは語用論で扱われることが多かった。確かに、記号形式そのものがもつ意味と、それが実際のコンテキストの中で使用されることにより持つ意味を明確に区別するのであれば、意味論と語用論は異なる説明対象と説明方法をとるものであり、直示表現も語用論で扱うべきである。しかし、仮にこの二つの違いを、事態解釈の際の、話し手の視点や、文脈的要素のかかわりの程度の違い(意味論に捉えるならば話し手の関わりは低く字義的な要素が強いものに対して、語用論的に捉えるならば話し手やコンテキスト・状況の事態への関与が強くなり、意味が発話機能も踏まえた解釈になる)と考えたならば、この二つの区別は連続的なものであると考えることができる。

また、より実際の使用に基づいた文法機能や意味を説明するのであれば、意味を「ある対象を表す」(事態を表す、関係を表す、物事を表す)のみならず、「なせそのように表わされたか」のレベルまで含めて考えることが重要である (cf. Langcker 1987)。実際、私たちが発話する際、文が表す意味「のみ」を表すわけではなく、文を発することにより、文が表す意味以上の意図を表すことが

ある (Austin 1962、Searle 1969)。意味のある発話であるためには、社会的に解釈される必要があり、言語の記号体系がもつ社会的側面を考える上でも、言葉の使われ方 (話し手の属性や話題、状況などを踏まえた) を、実際の使用に即して考えることは重要であるといえる。例えば、

(1) a. 窓を開けてくれませんか

b. この部屋暑いですね。

において、(1 a) は直接的な依頼を表すが (1 b) は依頼の仕方としては間接的である。(1 b) の「この部屋暑いですね」という発話が窓をあけるように依頼していると解釈されるには、話し手と聞き手の間に、解釈を行う上での取決め、もしくはコンテキストが共有されている必要がある。

解釈の根拠となる知識体系をコンテキストと考えたならば、会話の参加者がその知識や規則を共有していることはどのように確認できるのだろうか。従来、コンテキストとは、既に話し手と聞き手により予め共有された固定的な解釈のもととなる知識体系として捉えられてきたが、相互作用の場そのものをコンテキストとしてとらえると、その場でやり取りされた情報をもとに新たなコンテキストを構築する側面があることが指摘されている (Gumperz 1982)。個々のもつ意味をやり取りすることは、相互に影響を与え合い、社会的に共通概念を生成する (Blumer 1986) ことを意味することからも、規則にかなった解釈を生み出すことは、規則に従うことであると同時に、コンテキストを補強している側面もあるといえる。このプロセスはコンテキスト化 (Gumperz 1982) と呼ばれ、コンテキスト化には大きく分けて二つの側面があるといわれている。一つは、発話意図を観察可能にすることであり、もう一つは、相互行為の参加者に共有された言語行動に関する規範を示すことである。前者は、本来多義的である言葉の意味に対して、コンテキストを特定することで、解釈に制約を加え、あいまいさを解消することである。後者は、コンテキストを特定することにより、場をどのように認識しているかを示し、それにより対人配慮や、会話への参加の程度などを戦略的に相手に示すことでコミュニケーションをスムーズに行うことである。また、コンテキスト化を行うための手掛かりを Gumperz (1982) では「コンテキスト化の合図」と呼び、イントネーションなどの指示的意味を持たない記号における機能の重要性を指摘した。例えば「おでかけですか?」という発話において、低い声で重々しい調子でいう場合と明るく声の調子で言う場合とでは、相手に伝わる印象や解釈は異なる。つまり、プロソディにより解釈が誘導され、それにより聞き手は話し手が何を前提に発話しているかを理解する (井上 2005)。しかし、これはプロソディなどの非言語のサインのみならず、どの形式を使ってどのように表されるかにより、聞き手に伝わり方のみならず伝わる内容まで異なると考えると、言語表現にも当てはまると考えることが可能である。

3 コンテキスト化の手掛かりとしての指標

Peirce (1955) の指標性を持つ機能をもとに、Silverstein は、言語の指標的機能について考察を行っている (Silverstein 1976)。それによると指標性とは、「言語使用において、固有の指示作用

のみならず、その指示対象にまつわる前提化されたコンテキスト内の条件、社会的役割や特性、権威や地位、敬意や親疎意識、また、その価値などを明示的、非明示的に示す特性」であり、社会的価値に大きく依存することされている。また、指標性の概念は、語彙レベルから、談話レベルにまでわたる様々な概念を含み、その隣接的、指示的関連性に基づいて解釈が行われることから、直時表現も指標性を持つと考えることができる。

指標記号は、指標記号を指示的指標と非指示的指標に分類される (Silverstein 1976)。指示的指標とは、時制や人称代名詞など指示機能をもつ記号で、明示的な指示内容をもつ。例えば、一人称などは、「話し手」としての意味は持つが、どのレベルでの話し手であるかはコンテキストや発話内容に照らし合わせなければ特定できない。また二人称の場合も、それ自体では「聞き手」の意味しか持たないが、実際に具体的なコンテキストで使用されることにより、初めて指示対象が特定される。しかし、三人称はコンテキストに関わらず同じ対象を指す。その意味で、指示対象の創造性は一、二人称の方が度合いが高いといえる。一方、非指示的指標は、暗黙の社会的、文化的前提をもとに、性差などの社会的関係、対人関係を示し、明示的、命題的な意味に関わるメタ的 (説明的) な機能を果たす。特定の対象を指示する機能を前提にせず、コンテキスト内の指示体系も前提としないため、指示対象の創造的度合いが高い。例えば、「ぜ」と「わ」などの終助詞は、それ自体が「乱暴さ」と「繊細さ」を指標し、そこから間接的に「乱暴さ」が「男性らしさ」「繊細さ」が「女性らしさ」を指標し、それによりコンテキストの意味体系を構築する (Ochs 1992)。このような非指示的機能をもつコンテキスト化の合図としての機能と同様に、指示的機能もコンテキスト化の合図としての機能を持つと考えられる。意味作用という心的体験のみに意味の根拠を求めようとするのではなく、体験としてどのような表し方をするにより、どのような社会的意味づけがされているかを具体的に考えるならば、「言い方」一つで相手の心証が変わることは日常においてよくあるように、解釈する過程も、話し手が何をどのように話すかは、状況認識に基づき、その場がどのような状況であるのか、どのような発言が期待されているのか、参与者間の心理的・社会的距離感は何の程度なのかなど、相互行為の参与者で共有された具体的な社会的規範をふまえて観察する必要がある。このように考えるならば、意味や言語行動は、会話の参与者を取り巻く状況の一部であり、ここで媒体として機能する意味体系は、均質的集合ではなく、話し手、聞き手双方の相互行為に基づいて築かれた社会的なものであるといえる。話し手と聞き手の間に何らかの了解が成立するためには、会話の参与者が情報を知覚可能なものとして共有することが前提となり、この意味を可視化しているものが言語表現と考えるならば、非指示的指標のみならず、指示的指標にも、特定のコンテキストを生み出す機能があるといえる。

これを先ほどの指示的指標性に当てはめて考えてみると、次の二つの機能があると考えられる。

①発話意図 (視点) の観察可能性

表現の形式事態が相互行為において戦略的に行われており、その表現を通して、話し手のスタ

ンスや相互行為へのかかわりなどを指標する。

②コンテキストの有標化

相互行為の場をどのように捉えているか（参与者同士の親疎や形式的な場か、など）を示す。

どのような表現を選択しているかにより、視点や意味、場の捉え方も換わる。同時にコンテキスト、さらにはコンテキストの違いは、意味体系の違いと考えることができ、コンテキスト化の仕方により指示内容も変化することになる。その一方で、一つの形式の使われ方そのものはその形式が固有にもつ閉じた体系の中で決められる。一つの記号が様々な使われ方をする事により、創造的に用法が拡張されるが、その形式が固有にもつ体系的規範性から、意味拡張のプロセスにはある程度の傾向があると予想できる。つまり、形式によりコンテキスト化が行われるということは、そのコンテキストの意味体系が、その形式が持つ記号的規範性に影響を受ける側面があり、解釈の適切さもは形成されたコンテキストの規範により異なるといえる。

4 時制がもつ意味構造について

実際のコンテキストにおける機能を考察する前に、現在時制の意味構造について、先行研究をもとに確認しておく。

現在時制は発話時である現在に状況を位置づけると考えると、発話時は、基本的にその都度の瞬間的時間であることから、現在示は点的であるといえる。従って、

(2) a. Here comes our bus!

b. The ball is hanging in the air. —Now, he makes the catch. (安井：1982)

などのように、英語などでは瞬間的現在と重なる（同時の）出来事を記述する用法がある。しかし、これらの用法は、使われる状況などが限られていることが多い。

多くの現在時制の用法では、「現在」は瞬間的ではないことが多く、現在時制が状態動詞とともに使われた場合、現在の事実、状態を表わす。この場合、「現在」という時間はある一定の幅のある時間として捉えられ、文が表す事態はその現在において成立している状態を表す。

(3) a. He has a kind boss. (彼には親切な上司がいる)

b. He knows a lot of people. (彼は顔が広い) (『ジーニアス英和辞典 第四版』)

一方、動作動詞が使われる場合、現在の習慣的、反復的動作を表わす（しばしばalways、usually、oftenなどの副詞を伴う）。

(4) a. She practices the piano after dinner. (彼女は夕食後にピアノの練習をする)

b. He speaks English fluently. (彼は英語を流暢に話す)

c. I always fall asleep watching TV. (いつもテレビを見ながら眠ってしまう)

(『ジーニアス英和辞典 第四版』)

先ほどの現在を瞬間的に捉えた用法と異なり、この場合は、「一定期間繰り返される動作」を表す。現在が幅を持った時間である点は、状態動詞の用法と共通しているが、動詞の意味そのものだけでなく、その動作が繰り返されるという意味が加わる。

このように動詞により文のアスペクトは変化するが基本的には、時制機能は状況を現在時に位置づけることであり、それ以上のことを現在時制は述べないと考えることが妥当であるように思われる。そこから導かれる話者の視点やアスペクトの変化は、指示機能とは相関関係はあるが別のレベルのものであるように思われるからである。同様に、現在時のさきまでその状況が持続するのかどうか、また過去に成立していたかどうかを含意することもあるが、それは現在時制の意味に含まるというよりは、使われる動詞の性質やコンテキストにより解釈が異なることが多い。

類似した用法に、一般的真理を表わす用法がある。この用法も動作動詞が使われるが、動詞が表す動作そのものだけでなく、それが常に成立していることを表わす。

(5) a. Actions speak louder than words. (行動は言葉より雄弁に語る)

b. The proof of the pudding is in the eating. (論より証拠)

過去時制は、過去のある時点で起こっていた出来事、もしくは成立していた事態を表す。状態動詞が使われた場合、過去における状態を表すが、現在では成立していないことを含意する。

(6) a. She had a great faculty for absorb in information.

(彼女は情報を吸収する能力がすばらしく高かった)

b. I knew deep down that I would probably never see Marie again.

(マリーにはおそらく二度と会わないだろうと心の奥で分かっていた)

(『ジーニアス英和辞典 第四版』)

しかし、動作動詞で使われた場合、過去の動作、状態を表わす。

(7) a. We spent the whole afternoon walking about town

(私たちは午後いっぱい町を歩き回った)

b. He advised me on my study. (彼は私の研究についてアドバイスしてくれた)

(『ジーニアス英和辞典 第四版』)

また、現在時制の場合と同様、過去の習慣的・反復的動作を表わす (しばしば always、usually、sometimes などの副詞を伴う)。

(8) a. I always tried to remain neutral when they started arguing.

(彼らが口論を始めるといつも中立を保つようにした)

b. His father sometimes amused him with tricks.

(彼の父はふざけて彼を笑わせることがあった)

(『ジーニアス英和辞典 第四版』)

現在時制の場合とは異なり、過去時制においては、繰り返される動作かその時成立していた動作を表わすのかは、あいまいである。共起する副詞により判断されることもあるが、反復する出来事

にかかる時間が短い場合、一回の出来事として捉えられるのに対して、その出来事にかかる時間が長い場合、総称として解釈されると説明されることもある (Aarts 2008)。つまり、動詞が表わす事態にかかる時間が短ければ、話し手は出来事を一つの客体化された事態として捉えるのに対して、時間が長い場合、一つの事態として客体化するのではなく、話し手を取り巻く現在を構成する性質として捉えられることになる。

(9) a. The light flashed. (灯りがまたたいた)

b. The Catholic mass was recited in Latin. (カトリックのミサはラテン語で朗唱された)

(Aarts 2008)

Comrie (1976)、Smith (1997) では、事態を客体化させて捉える視点を「外的視点」(external viewpoint)、総称として現実を構成する一要素として捉える視点を「内的視点」(internal viewpoint)と呼び、時制には基本的にこの二つの解釈の視点があるとしている。それによると過去時制の一回の出来事としての読みと習慣的行為を表す状態読みとであいまいさがあるということは、過去時制は相に関して中立的であり、どちらかの視点がとられやすいということがない、ということができる。それに対し、現在時制にはそのような中立性はなく、解釈は動詞のアスペクトに関わらず、状態として解釈されることが多い。そのため、動作動詞を使った現在時制であっても、習慣的行為や、総称を表すことが多い。従って (10) には総称としての解釈しかない。

(10) The Catholic mass is recited in Latin. (カトリックのミサはラテン語で朗唱される)

(Aarts 2008)

しかし、過去時制は動詞が持つ時間幅によって解釈が異なるにもかかわらず、アスペクトに関して中立であるといえるのか (例えば動詞のアスペクトがそのまま文においても反映されるのであれば中立であるといえるが、時間幅によってアスペクトが異なることが中立的といえるかには疑問が残る)、またなぜ現在時制では、一回の出来事としての読みが起こりにくいのか、繰り返されるといふ事態は、動作なのかそれとも状態なのかという、指示機能と事態解釈の関係は、ここからは説明できない。

5 位置づけとしての時制と事態の型表示としての時制

現在時制が状态的に事態を捉える傾向や過去時制の動詞のアスペクトと解釈の関係を考えると、テンスとアスペクトには何らかの相関があると考えられるが (Hornstein 1991)、動作は時間的幅のとらえ方も有界性という点からも状態とは異なり、その異なる意味が一つの時制の中で共存しているとすれば、逆にそれらをどのように分けているかに関する基準も必要になる。状態は時間的な有界性がなく、また時間的推移も含まれない。例えば、「牛は草食である」といった場合、発話時である現在のみ草食というわけではなく、基本的にそのような性質を常に持っている、従ってその性質が変化するということも含まれない。繰り返される習慣的行為を同様に捉えれば、例えば

「彼は毎朝ジョギングをする」などは、「毎朝ジョギングをする」ことから「彼」のもつ性質の一つであり、これが繰り返される時と繰り返されない時があることや、またこの習慣が変化することは、この用法の意味には含まれない。実際、習慣や格言を表す文は総称の一つのタイプとして捉えることもある (Krifka et al. 1995) ことから、Langacker (1996: 292) では、総称の述定が明示する状況は「有界・非有界いずれの期間にもわたって」成立する、「すなわち、その妥当性には時間的な作用域 (scope) がある」と考え、総称性は現在時制の事態のとらえ方の一つの傾向としている。

Smith (1997) によると、その解釈の違いは、語彙的要素 (とくに時間的尺度) により決まるとしている。動作や出来事には、始まりや終わりといった段階があり、出来事が始まってから終わるまでには一定の時間がかかる。現在が瞬間であると考えれば、その出来事が展開全体は捉えることはできないため、出来事の成立まで述べることはできない。それに対して、状態はそのような時間的な概念はないため、たとえば瞬間的であってもその状態が確認できれば、その状態が現在成立していることを述べることはできる。このことから、現在時制は意味的に状態述語としか両立しないとしている。しかし、動作動詞であっても、例えば英語であれば現在の動作を表すことはできる。また、現在時制や過去時制が、瞬間的な現在や過去だけをあらわすわけではない (Binnick 1991: 247-51, Dahl 1995)。例えば、現在時制が未来を表すことがある。

(11) Dinner is served at seven. (夕食は7時です)

夕食の時間を言っていることから、発話時は7時より前であることは容易に予想でき、また、現在から先の未来のことを、現在時制で表しているということは、未来が現在と何らかの形で関わるものが予想できる。現在を瞬間的に捉えるのであれば、夕食時間は現時の中にはおさまらず、そのため、(11) は現在から7時までの時間を継続的に現在と捉えることになる。Dowty (1986) では、このような文の解釈に対して、状態というアスペクトが変化を伴わず、現在において成立している状態は未来においても成立しうる可能性を十分に含むことから、ある特定のアスペクト (状態や完了など) は、現在時制が未来時まで含むとしている。つまり、動詞の意味により文レベルでの時間の解釈が影響を受けることになる。

また、習慣を含む状態は現在時制以外の、過去時制や進行形でも表すことができる。

(12) a. I was always losing thins. (よくものがなくなっていた)

b. He walked to school when he was in college. (大学へは歩いて通っていた)

Comrie (1985) は、テンスとアスペクトは意味的に異なるものとしてとらえ、アスペクトは状況の内的な時間構造 (e.g. 変化が含まれているかどうかなど) に関わるため、発話時に対する時間軸上での状況の位置には関わらないとしている。また、Dixon (2005) は、文法カテゴリーにとどまらず、意味的に考えて、単純現在時制・過去時制が perfective (完了相) な事態を表すのに対して、進行形を imperfective (非完了相) に事態として捉えている。完了相は事態を内部構造に言及することなく、一つの完結した出来事としてとらえる。したがって事態にかかる期間についても問題に含まれないが、非完了相は、事態をある時間的幅を持った出来事として捉える。非完結相にお

いては、事態はプロセスの一断片として捉えられるが、完結相は、一つの塊として事態を捉えるため、位置づけの意味を含む点で非完了相とは異なる。

Dixon が状態を含む単純形を完了相ととらえたのは、外的視点からアスペクトを捉えたからであると考えることができ、現在の状況を構成する一要素、もしくは、一つの事態として捉えるならば、状態も一つの完結した事態であるのに対して、内的視点でとらえたならば、時間的均質性や非有界性から非完了相と捉えられる。各時制がもつアスペクトのバリエーションは、話し手の視点の置き方によるもので、基本的にそれぞれの時制は、この二つの視点を持つが、話し手と位置づけられた事態の位置関係から、どの解釈をとりやすいかに傾向があり、現在時制は文レベルにおいて、状态的に解釈される傾向が強く、動作動詞が使われても、習慣などの状態として捉えられる傾向がある。それに対して、過去時制は相に関しては中立的な傾向が強い。これは、現在時制は話し手が現在の「内部」にいて、さらにその現在に事態を位置づけることから、内的視点をとる非完了相の解釈を受けやすいのに対して、過去時制は現在とは切り離された過去に事態を位置づけることから、外的視点をとる完了相の解釈を受けやすいといえる。

ここまでの時制のとらえ方に関する検討をまとめると、現在時制と過去時制の意味的対立は次のようになる。事態のとらえ方には、話し手の視点の起き方が大きな影響を与え、その視点の起き方には、外的視点と内的視点の二つの記号の仕方がある。外的視点の起き方とは、出来事の外側に視点を置き、一つの完結したものとして出来事を捉えるため、文レベルにおいても動作などの完了相を表す文として解釈されるのに対して、内的視点は、出来事の内部に視点を置き、出来事の変化する経緯を通して出来事を捉えるため、文レベルにおいては状態などの非完結相を表す文として解釈される。動詞が持つ時間幅如何に関わらず、どの視点で捉えるかにより、文のアスペクトは異なり、時制により、そのどちらの視点が反映されやすいかに程度の違いがある。

次に、これらの性質が、実際のコンテキストで使用されると、どのような機能を果たすか、実際の対談データをもとに検討する。

6 コンテキストにおける機能

コンテキストにおける言語形式がもつ指示性についてまとめたものに Benveniste (1966) や Weinrich (1982) のいう「説明」時制／「語り」時制がある。

「説明」時制とは、話し手が「事実を目撃者として、直接の関係者として詳述する時の」時制、あるいは発話行為そのものから談話世界が話者の世界とつながる世界であることを表す時制である。これに対し、「語り」時制とは、話者の世界とは直接つながらない「過去の出来事を物語る」時制である。

「説明」時制の「話者の世界の中に事態を位置づけること」は、話し手が目撃者としてその場で起きている出来事を記述したり、現在事実として成立していることを記述したりすることは、現在

時制の意味構造と一致する部分がある。また、「語り」時制は、話者の世界からは独立した世界の出来事を表すことから、話し手のいる現在から時間的に距離のある（関連のない）過去の出来事を記述する過去時制と一致すると考えることができ、実際、「語り」の中心的な時制は単純過去であることが多く、同時に、「語り」時制が話者とは接点のない談話世界を構成するのは、過去時制の意味構造から派生した機能であるといえる。これらが扱っているのは、語っている声がどこから事態を捉えているかであり、語ることへの関わりと、表す事態に対するかかわりの二つの要素を持っていると考えることができる。これは時制表現における内的・外的視点と類似しており、何らかの相関があると考えられる。

以下では、それぞれの述べ方（「語り」と「説明」）からみた現在時制、過去時制が表す機能の違いをみていく。時制による語り方の違いは文学テキストにおいて論じられることが多かったが、今回談話データを用いたのは、これらの機能が、日常の会話においてもよくみられる現象であると考えたからである。

6.1 出来事に関する「語り」と「説明」

まず、過去時制が過去の事態を「語る」用法について考えてみる。

ある会社の社長（原田）がヒット商品のアイデアを考えだしてから、定番商品になっていくまでの話題で、そのプロセスを会社の外側にいる人間（糸井）から、それがどのように見えていたかを説明する会話である。

(13) 糸井：最初は爆発的に売れたけど、なかなか定着しない商品だな、と思ってたんです。

原田：はい。

糸井：「定着しないからやめよう」という考えもあったと思うんです。でも、そうではなくひたすら出し続けた。そのうち気づいたら定番商品になっていたわけです。

ほぼ日刊イトイ新聞「原田泳幸さんと、価値について」

<http://www.1101.com/okane/harada/2010-08-19.html>

最初の「思ったんです」は、話し手が過去に認識していた事実（思っていた内容ではなく、思っていたという事実）を表わし、続けて「出し続けた」「なっていた」と過去の事実を表す過去時制が続くことにより、ある一連の動作をプロセスを追って、客観的に起こった順番に沿って淡々と表わす。これにより、話し手はそのプロセスから離れた場所から事実を把握していることが示される。またそれぞれ「続けた」「いた」のように、状態動詞であっても、現在とは切り離された時間的に有界な一つの完結した事態として表される。

次の例の場合も、話し手が感情をこめて何かを記述するというよりは、話し手の知覚を端的に時間を追って客観的に記述しているという印象を受ける。

(14) タモリ：とつぜん、暗闇のなかからスーっと、自転車に乗ったかなりの歳のおじいさんが出てきて、オレの横を、そのままスーっと、通りすぎてった。

糸 井：うわー……。

タモリ：オレは、なぜだかわからないけど、小走りだね、そのじいさんを追っかけたんです。

糸 井：ほう！

タモリ：そしたら……100メートルぐらい先で最後に一回、「ちーん」と鳴らした。

糸 井：うん……！

タモリ：そしたら、しゃしゃしゃしゃしゃーっと7～8匹のノラネコが出てきたんですよ。
どこからともなく。

ほぼ日刊イトイ新聞「タモリ先生の午後2009」

http://www.1101.com/tamori_2009/2009-01-03.html

(14) の例も同様に、過去時制により、傍観者として過去において起こった出来事を淡々と列挙する。このように、過去時制では、過去における一つの完結した事実を示す。

それに対して、現在時制の場合、過去の出来事を箇条書きのように列挙する用法も同様にあるが、過去時制の場合と異なり、「語る」のではなく「説明」に意味が変わる。

(15) ご飯の場面って、性格を表す場面に使うでしょう。映画じゃないんだけど、筑紫哲也さんが福田赳夫元首相のことを『旅の途中』という本に書いてるんですね。

福田赳夫の朝ご飯をテレビで撮った。卵かけご飯を食べる。

ここまでは普通ですね。

卵にお醤油を入れてご飯にかける。

そうするとご飯が少なくなってきたあたりで、器に卵がちょっと残ってるじゃないですか。残った卵がもったいないからって、ご飯を卵のほうの器にまた盛ってそれを食べる。

これでね、本当に福田っていうのは正真正銘儉約家なんだ、大蔵大臣なんだっていう。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。—藤原帰一さんと映画のごはん」

http://www.1101.com/iijima_shokudo/fujiwara/2009-11-02.html

ある過去の出来事において、状況の説明は過去時制で表されるが、実際に焦点を当てたい動作（福田赳夫の食べる動作）を表す表現は現在時制で表される。それにより、動作があたかも目の前で行われているかのような、強い印象を聞き手に与える。いわゆる歴史的現在の用法であるが、時間的な流れに沿って動作を列挙しているにもかかわらず、客観的に一つ一つの事態を並べるといよりは、食事の様子を本の中で描いているという事態を一つの出来事として捉え、話し手がその事態の内側に入り経過とともに、あたかも当事者の目線から見ているように、各段階の進行を順を追って説明している。また、現在時制で表すことがより相手に強い印象を与えるということは、話し手があたかもその場で見ているように記述するのみならず、聞き手にもそのような印象を伝えているという点である。

これは進行形にも同様の機能がある。ただし、進行形の場合は、事態の内側から、単純現在時制のような生き生きとした記述をするというよりは、進行中の状況に関する説明の要素が強くなる場

合がある。

以下は、学生時代の食事に関する話題で、食事がとれる時間に大学内でおいしく食事をするのがいかに難しかったかを、昔の留学していたころを思い出しながら語る場面での発話である。

(16) 寮の食堂でも、早い時間には結構いいものが出てるですよ。

でも授業が終わってからだともうそりゃすごいものがあるって。

だいたいカチンカチンになった鶏肉で、量が多いんだけど切れないの。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。—藤原帰一さんと映画のごはん」

http://www.1101.com/ijijima_shokudo/fujiwara/2009-10-30.html

進行形で内的視点を表すことにより、状態性がより強調され、食堂の様子に話し手の注意が向き、そこで出される料理について、「出された」立場から記述される。

仮に現在進行形が現在時制になった場合、内的・外的視点のどちらでもとりうることから、食堂が場所というよりは一つの設備として捉え話題として扱うことも、場所として捉えてそこで出される料理を主題として扱うことも可能である。実際次の文の「すごいものがあるって」の「もの」は「料理がすごい（すさまじい）」とすることも「場所としてすごい（すさまじい）」とすることもできる。

(17) 寮の食堂でも、早い時間には結構いいものが出るですよ。

でも授業が終わってからだともうそりゃすごいものがあるって。

このような、現在時制の機能は、過去時制の場合と比べて話題・主題に対する話し手の関わる程度が高いことから、対象を、属性を付与するモノとして捉え、それを話題化するのに対して、過去時制の場合は、あくまで、現在とは独立した時間・空間に存在するコトとして捉え、話題に対して、状況説明をしたり、情報を付加したりする働きがある傾向があるといえる。また、現在時制の場合は、視点は、その事態の起きているまさにその場に移入し、いかにも目の前で起こっているかのように事態を表すが、過去時制の場合は、あくまで会話の場を離れることなく、現在から事態がどうだったかを表す傾向があるといえる。

6.2 話し手の思考や知覚に関する「語り」と「説明」

発話内容ではなく、発話するというコミュニケーションに関わる行為に対する話し手の関わり方が時制で表されることがある。

次の例では、これまで観た映画やテレビドラマについて振り返る場面で、現在感じていることについては現在時制（思うんですけど）で表されるが、その理由は過去時制で示されている。

(18) なんだろう。テレビの長く続くドラマは、食べ物のシーンを入れないとたないんじゃないかと思うんですけど。「寺内貫太郎一家」には、たえず納豆かき混ぜてるおばあちゃんがいたし。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。—藤原帰一さんと映画のごはん」

http://www.1101.com/iijima_shokudo/fujiwara/2009-11-03.html

現在時制が話し手の考えや知覚などの内的感覚を表し、話し手の思考とは独立した客観的事実は過去時制で表すということは、時制としての現在時制と過去時制がもつ意味から類推しやすい。同様に、内的知覚に近いものとして、内言が現在時制で表されることがある。

(19) 金子（きんす）で人を雇うということは、たぶん小銭しかなかったろうし、米だけはあったっていう。すごく重みもあった。

命を預かった。だからお前たちの命を助けてやる。

もともと農民だった人たちがほとんどだから、一気につながるっていう思いもあってね。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。—藤原帰一さんと映画のごはん」

http://www.1101.com/iijima_shokudo/fujiwara/index.html

話題は、映画『7人の侍』に出てくるおにぎりに関することで、それまでは過去時制が使われ状況的な説明が続くが、「だから助けてやる」で現在時制では語り手ではなく、登場人物の内言をそのまま表す。「預かった」は完了とも解釈できるが、語り手の視点は現在にありながらも、登場人物を対象化しその発話内容を直接現在時制で表していると考えることができる。

次の例では、対談をしながら、リクエストした食事をフードコーディネーターに作ってもらい、それを食べながら映画と食に関して対談をするという企画における、最後の部分の発話である。自分がリクエストしたお茶漬けのお礼を言いながら、その感想を「びっくりする瞬間が人生に一桁ぐらいある」が、それに匹敵するほどお茶漬けがおいしくて驚いたという趣旨を伝える際、それまで、過去時制で語られていたが、感想の部分で現在時制に切り替わる。

(20) いや、ほんとうにありがとうございました。きょうは、お茶漬けでした。これがお茶漬けだったのかって、ほんとうに驚きました。

映画を観てね、「これが映画なのか」ってびっくりする瞬間が人生に1桁ぐらいあるんですよ。映画の観念が変わっちゃうようなね。

ほくは、きょうはお茶漬けの観念が変りました。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。—藤原帰一さんと映画のごはん」

http://www.1101.com/iijima_shokudo/fujiwara/2009-11-06.html

ここでも、話し手の内的感覚が現在時制で表されているが、先ほどの現在時制で表された文が、話題となる対象を表して、過去時制がそれに対する説明や、付加的情報を示す際に使われているのに対して、この場合はその逆で、過去時制で表された文が発話の主題・趣旨の部分であり、現在時制で表された文はその説明にあたっている。現在時制で説明された文は、過去時制の文と比べ、事実を挙げて説明するというよりは、内的知覚に照らし合わせて類推している点に違いがみられる。

また、過去のことであっても場面設定（いただいたんですが）や説明（天麩羅でしたね）については、過去の出来事として過去時制で表されるが、その時の知覚については現在時制で表されることがある。

(21) 大学のそばの天麩羅屋がそうで、偉い教授とお供で何回かいただいたんですが、味、全部覚えてないんですよ。ほくが、ガチガチで。

そこに、1人で行った時があって、その時にはね、「藤原さんだったらこれでいいわね」って、出る物が全く違うの。

これは民主主義とは違う身分制社会の天麩羅でしたね。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。—藤原帰一さんと映画のごはん」

http://www.1101.com/iijima_shokudo/fujiwara/2009-11-05.html

現在に視点を置いて過去の出来事を過去時制で表わしているが、内的知覚の部分では、語る声が現在時制に戻る。現在時制で表されることで、大学の近くにあった天麩羅屋で食事をした時のことやその時の自分自身の感覚を思い出すしながら、なるべくその時食べたものの味に意識を向けていることが、食べたものに関する記述が現在時制であることから垣間見ることができる。しかし、最後の「身分制社会の天麩羅でしたね」で、過去時制が用いられることにより、完全に過去の出来事とその時の意識を思い出すだけでなく、その時の料理の感想に意識を向けながらも、あくまで「今考えると」という、語り手としての主体は現在から語ることにより、視点が過去に移り切っていないことがわかる。に視点を置いて、現在にあることが示されている。

6.3 言い直しの効果

次の例では、話し手の考えたことが現在時制で表された後、それが過去時制で言い直されている。

(22) ずっとつくっていくなかで、やっぱりどんどん歳をとっていくと、おなじ大学行った友だちがお金も持ちだすし、家族も持ちだすってことでちょっとあせったりもするんですけど、なんかどっかで一時（いつか）に決めたんです。

ずっと自主映画のままで終わっても、絶対にこれから一生映画をつくり続けるって。

このままちゃんと商業的な映画を撮れなくても、とにかくこのまま続けて、映画をつくと決めた。決めたらだいじょうぶになったというか。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。荻上直子さんと、『トイレット』のごはん

http://www.1101.com/iijima_shokudo/ogigami/2010-09-01.html

同様に、決めた行為は過去時制で表されるが、決めた内容については現在時制で表される。また、それを過去時制で言い直すことにより、心情的に距離を置いたとらえ方をしていることが伝わる。また、それにより、話し手の内的発言が語りのコンテキストに「落とされる」もしくはその一部になると解釈できる。

逆に、過去時制だったものが、現在時制で言い直されることにより、現在でも状況が継続していることを表し、それにより過去の出来事が一時的なものであることを強調する働きをすることもあつた。次の例では、最近の飼い犬の様子について語った後で、「そんなことなかったの」と過去時制

でいったん表し、すぐ後で「ない犬なのに」と現在時制で言い換えている。

(23) それからね、どうも不良化しててさ、散歩から帰ってきたとき、ぼくがお風呂場でお湯を出している間、玄関の土間のところでおとなしく、足を洗われるのを待ってたのに、今日、こう、廊下のほうまで、足をかけてたりしててさ（笑）。……（中略）……そんなことなかったの。ない犬なのに。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。清水ミチコさんと健康ごはん」

http://www.1101.com/ijijima_shokudo/shimizu/index.html

過去時制の場合は、今までそんなことはなかったのに、つまりおとなしく足をあらわれるのを待っていたのに、「今日」初めて、廊下の方までかけるという行動をとった、という、特定の行為に対して「それまでなかった」ことを述べているのに対し、「ない犬なのに」と現在時制で言い直すことにより、廊下の方まで足をかけるという行為に限定せず、そのような、自分の好きに動き回るような行動をとることはなく、（推測を含めるならば）行儀のよい犬だったのに、と犬そのものを対象化しその性質に関する言及を含んでいる。同時に、時制を変えて言い換えることにより、今までなかったことが起こったという過去の「出来事」から、飼い主として認識していた飼い犬の性質がその時には「存在しなかった」という現在の状況を表すという、語り手の視点の変化も表している。

しかし内的感覚が必ず現在時制で表されるわけではなく、次の例のように、過去時制で表されることもある。次の発話は、以前の撮影現場での経験を振り返りながら、次回作のアイデアを作っていた経緯を説明している。

(24) 『かもめ食堂』のとき、フィンランドで、現地のカメラマンとかスタッフでやってすごくよかったですね。

あのゆったりさって、彼らがつくってくれたと思っていて。わたしは日本でやってきて、どんどんせっかちに、次、次、次！ ってあせりながら映画撮るのに慣れていたんですが、彼らは絶対に走らないし、すごく、ドンとかまえていて。

最初はもう、どうしてもこんな時間がないのにのんびりしてるんだろう、ってあせってたんですけど、もう3日めくらいからあせってもしょうがないので、彼らに合わせようと思いましたが、そういう雰囲気になれた気もしますし。

ほぼ日刊イトイ新聞「飯島食堂へようこそ。荻上直子さんと、『トイレット』のごはん」

http://www.1101.com/ijijima_shokudo/ogigami/2010-08-27.html

最初の過去時制「すごくよかったですね」は、過去の状況を現在から振り返って、過去時制で表すことで、現在から見た過去の状況を示し、同様にその次の「作ってくれた」も過去の状況を振り返りながら、過去一緒に仕事をしたスタッフに対する評価を示している。ここまでの過去時制は、撮影示の状況の一つ一つ捉えなおしている意識が記述されている。しかし、次の「慣れていたんですが」では、さらに、過去の撮影時よりもさらに以前の監督自身の状況を表している。また、次に

過去進行形から、話し手がのんびりしたスタッフに「焦っていた」という意識のさなかに「そういう雰囲気になった」という、意識の変化が起きたことを表している。ここでの表現はすべて過去時制（もしくは過去進行形）であるが、出来事などの事態のみならず、話し手の思考のような内的な意識の流れであっても、客体化して捉える場合は、過去時制で表わされている。先ほどの現在時制における列挙の仕方との違いは、話し手が事態に対して外的視点をとっている点である。撮影プロセスを一つの完結した事態として捉えその中の意識の流れを示すのではなく、最初の「すごくよかったですね」の理由を振り返りの中から示していて、あくまでもその当時の自身の思考や感情を「過去に感じたこと」として外側からとらえている点で、現在時制での記述の仕方が異なるといえる。

7 まとめ

本稿では、指示表現、特に時制に焦点を当て、コンテキストにおける機能について考察を行った。事態の解釈はどの視点から捉えるかによって異なるが、それぞれの時制に解釈の傾向があり、それに応じてアスペクトやコンテキスト上の機能も変化することがデータを通して確認された。現在時制は、状況に埋め込まれた内的視点を取り、対象を事態に埋め込まれた視点から捉える傾向がある。ここから、コンテキスト中で事態を表した場合①属性を付与される対象としての、モノ化され主題化された出来事を表し、また②話し手の内的意識・知覚を表した場合は、話題に対する内省を通した理由づけや、事態を捉える視点を示す傾向がある。それに対して、過去時制は、外的視点を取りやすいことから、対象を客観的・個別的に捉える傾向があり、その結果コンテキスト中で使用された場合、事実の列挙や状況の説明、話し手の考えに対する客観的理由づけなどを表わす。

時制の指示機能は、指示対象をコンテキストに位置づけることとして考えると、対象となる事態をどこの視点から捉え、どのようなスタンスで語るかに関わるといえ、それにより、事態の表わされようや語る場としてのコンテキストにも影響を与えるといえる。また、アスペクトの変化に関しては、位置づける主体と、対象を位置づける場所（現在か過去）における位置関係が関わっていることが予想され、身体性の問題とともに論じることで興味深い議論ができるのではないかと予想される。

(はらだ よりこ・本学非常勤講師)

参考文献

- Aarts, Bas, McMahon, Apri, (2008). *The Handbook of English Linguistics*. Blackwell.
 Binnick, Robert I. (1991) *Time and the verb*. Oxford: OUP.
 Blumer, H. (1986) *Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, University of California Press.
 Bybee, Joan, Revere Perkins, and William Pagliuca (1994) *The evolution of grammar*. Chicago: University of Chicago Press.
 Comrie, Bernard. (1976). *Aspect*. Cambridge: CUP.

- . (1985). *Tense*. Cambridge: CUP.
- Dahl, Osten. (1983). "Temporal Distance." *Linguistics* 21: 105-122.
- . (1985). *Tense and Aspect Systems*. Oxford: Blackwell.
- Declerck, Renaat (1991) *Tense in English: its structure and use in discourse*. London: Routledge.
- Dixon, R. M. (2005). *A Semantic Approach to English Grammar*. 2nd edn. Oxford: OUP.
- Dowty, David (1986) "The effects of aspectual class on the interpretation of temporal discourse: semantics or pragmatics?" *Linguistics and Philosophy* 9, 37-61.
- Émile Benveniste (1966) *Problèmes de linguistique générale*, 岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』、みすず書房、1983年
- Givón, Talmy. (1993). *English Grammar: A Function-Based Introduction*. Amsterdam: John Benjamins.
- Gumperz, J. (1982). *Discourse Strategies*. CUP.
- Hornstein, Norbert (1991) *As time goes by*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Langacker, W Ronald. (1991). *Concept, Image, and Symbol: The Cognitive Basis of Grammar*. Berlin: Mouton de Gryter.
- . (1991). *Foundations of Cognitive Grammar, Volume II*. Stanford: Stanford University Press.
- Klein, Wolfgang (1994) *Time in language*. London: Routledge.
- Krifka, Manfred, et al. (1995). "Genericity: An Introduction." In Gregory N. Carlson and Francis Jeffry Pelletier, eds., *The Generic Book*, 1-124.
- Leech, Geoffrey N. (1971). *Meaning and the English Verb*. London: Longman.
- Lyons, John. (1968). *Introduction to Theoretical Linguistics*. Cambridge: CUP.
- . (1977). *Semantics*. Cambridge: CUP.
- . (1980). "Deixis and Modality" *Sophia Linguistica* 12: 77-117.
- . (1991). *Natural Language and Universal Grammar*. Cambridge: CUP.
- Ochs, E (1992). "Indexing Gender". Duranti & Goodwin (eds), *Rethinking Context*: CUP.
- Partee, Barbara (1984) "Nominal and temporal anaphora". *Linguistics and philosophy*. 7, 243-86.
- Peirce, C.S. (1955). *Philosophical Writings of Peirce*, New York: Dover.
- Reichenbach, H. (1947). *Elements of Symbolic Logic*. New York: Macmillan.
- Silverstein, Michael. (1976). "Shifter, Linguistic Categories, and Cultural Description". In Keith H. Basso and H. A. Selby, eds., *Meaning in Anthropology*. Albuquerque: University of New Mexico Press.
- Smith, Carlota S. (1997) *The parameter of aspect*. dordrecht: Kluwer Academic Publishers.
- Smith, Carlota S. (2003) *Modes of discourse: the local structure of texts*. Cambridge: CUP.
- Vendler, Zeno. (1967). *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.
- Weinrich, Harald, (1982). 『時制論：文学テキストの分析』 脇阪豊・他訳、紀伊国屋書店
- 井上逸兵 (2005) 『ことばの生態系—コミュニケーションは何でできているか』、慶応義塾大学教養研究センター選書
- 安井稔 (1982) 『英文法総覧』、開拓社
- 『ジーニアス英和辞典 第4版』(2006)、大修館書店